

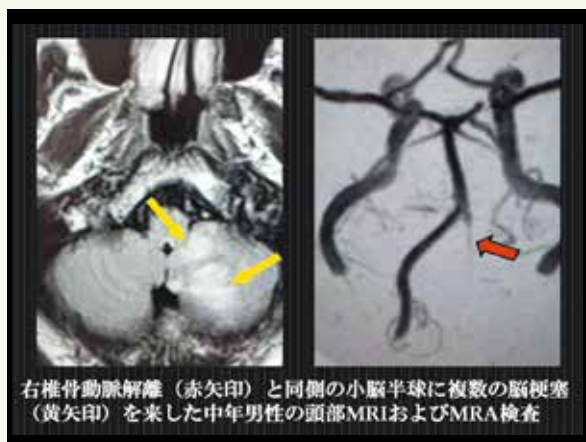
4000万人の頭痛 152

千夜一夜の頭痛物語

眩暈と嘔吐を繰り返し熱中症と診断されたが、
脳血管解離を発症していた中年男性

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu



右椎骨動脈解離（赤矢印）と同側の小脳半球に複数の脳梗塞（黄矢印）を来した中年男性の頭部MRIおよびMRA検査

近年の異常気象に伴い、体温超えの暑さが常識となるような夏期の暑さ、特に夜間に多量の発汗による熱中症から脱水症状を来して、眩暈や意識障害で救急受診される方が後を絶ちません。

熱帯夜に発汗を来し、眩暈や嘔吐で受診した際、夜間で頭部MRI検査など詳しい検査が行えず、とりあえず頭部CTスキャンで明らかでない異常所見がなく、頭痛を伴わなければ、熱中症と診断され、点滴など補液処置を行い帰宅するケースは一般的によくあると思われます。しかし、その背後に実は重大

な疾患が潜んでいることもあるのです。この中年男性は、眩暈と嘔吐で夜間救急受診し、熱中症と診断され点滴処置を行い、一旦帰宅したものの、一向に症状が改善しないため、翌日に再度受診されました。頭

部MRI検査を行ったところ、右椎骨動脈が血管解離を起こし閉塞した結果、その栄養部位である小脳に脳梗塞を併発しており、嘔吐や眩暈はこのためであると診断、入院加療となりました。

幸い、脳梗塞による小脳の腫れも酷くはならず、約1カ月後に独歩で帰宅されたのでした。通常、椎骨動脈の解離を来した際は、同側片側後頭部に激痛を来し、痛みが持続するのが通例ですが、ごくまれに痛みを来さず、脳梗塞のみで発症することがあります。

またここ数年、新型コロナウイルス感染症が蔓延し、感染もしくは頻回の新型コロナウイルスワクチン接種後に人体の免疫のバランスが崩れ、潜在する帯状疱疹ウイルスの再活性化により帯状疱疹の発症率が上昇しています。この帯状疱疹ウイルスは神経のサテライトである神経節に潜在し、特に頭部では三叉神経や後頭神経領域に帯状疱疹を発症することが多いのです。これらの神経は、大きな脳血管周囲に分布しており、また帯状疱疹ウイルスは唯一、脳血管壁に入り込み増殖可能なウイルスとされており、脳血管の怪我ともいえる血管解離を来す因子となり得

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、学校法人東京女子医科大学 評議員、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーフケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すぎの木クリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。

昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クロスアップ現代」など、テレビ出演も多い。「頭痛女子のトリセツ」（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。2024年6月号より、ANAグループ機内誌『翼の王国・TSUBASA -GLOBAL WINGS-』にて『雲の上の診察室』連載中。



新刊「ウルトラ図解 おとなと子どもの頭痛」
監修/清水俊彦
法研（本体1600円+税）
2月18日（火）発売

